

芝ヶ丘遺跡発掘調査概報

——市立石切中学校校舎増築工事に伴う第4次調査——

1985

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市立石切中学校敷地が、芝ヶ丘遺跡の範囲内に含まれていることは、昭和47年の校舎増築工事に先立つ試掘調査によって確認され、その年の本調査によって縄文時代から古墳時代まで続く遺構・遺物が検出され、良好な状態で遺跡が残されていることがわかりました。

しかしながら、本校は昭和28年に創立された歴史の古い学校でありまして、木造校舎が多く残されており、長年の歳月による傷みも激しく老朽化が進んでおりました。東大阪市教育委員会では、木造校舎を新しく建替えるとともに教育環境の充実を計る必要に迫られ、これまで順次工事を進めてきており、その都度、工事に先立って発掘調査を実施しております。

今回報告します芝ヶ丘遺跡第4次調査も校舎増築に伴う発掘調査であります。今回の調査では、縄文時代から古墳時代までの遺構を確認し、従来の資料にさらに新たに資料を加えたことになり、芝ヶ丘遺跡の全体像に一歩近づいたことになろうかと思います。今後は、本遺跡の範囲を把握し、現在までの資料を総合的に検討し、全体像の解明に努力する必要性を痛感致しております。今回の報告が、その一助になれば幸いです。

最後に調査実施にあたっては、東大阪市建設局、教育委員会、株式会社増田組の多大なご協力を受けた他、調査に従事された関係諸氏に深く感謝の意を表する次第です。

昭和60年3月30日

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 木寺 宏

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が計画した市立石切中学校校舎建設工事に伴う芝ヶ丘遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が東大阪市教育委員会の委託を受けて実施したものである。
3. 調査は、現場調査を昭和59年10月8日から11月30日まで実施し、以後昭和60年3月30日まで整理作業をおこなった。
4. 調査体制は以下のとおりである。

事務局長	寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
庶務部長	吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）
調査部長	原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部	安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
	上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当	下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課）
	曾我恭子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査補助員	山内康資、築地 秀、外村利行、山藤 誠、益田住明、竹林康輔、橋本正幸 藤江啓市、倉橋門治、国貞 純、藤崎博子、白沢千秋、小倉由紀子、林美子 子、佐藤あゆみ、安原文子、大西ひとみ、辻林美幸、山口真澄、舛井真由美
5. 遺構の名称は、略称をもって表記している。S D…溝、S K…土塁、S P…柱穴と表し、検出した順番に数字をついている。現地の土色及び土器の色調は、農林省農林水産技術公議事所監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」に準じており、記号の表示もそれにしたがった。
6. 本書の執筆は、1～3・5を下村が、4を曾我がおこなった。
7. 柱材は、財団法人元興寺研究所に委託して保存処理をおこなうとともに、樹脂鑑定を依頼し、結果を掲載している。同研究所の内川優秀、松川隆嗣氏にお世話になった。明記してお礼申し上げます。
8. 遺構写真は、現場担当者が撮影し、遺物写真は、新生堂フォト落合信生氏に委託して撮影をおこなった。
9. 調査の実施にあたっては、石切中学校の関係者の方々及び東大阪市建設局、株式会社増川組の方々に大変お世話になった、厚くお礼申し上げます。

本文目次

はしがき

例 言

1. 調査に至る経過.....	1
2. 位置と環境.....	2
3. 調査の概要.....	4
1) 地区割.....	4
2) 層 位.....	4
3) 調査の成果.....	5
4. 出土遺物.....	11
1) 縄文土器.....	11
2) 弥生土器.....	14
3) 須恵器.....	14
4) 韓式系土器.....	15
5. まとめ.....	17

挿図目次

第1図	調査地点位置図	1
第2図	遺跡位置図	3
第3図	遺構配置図	4
第4図	西壁断面図	5
第5図	掘立柱建物跡実測図	6
第6図	P19実測図	7
第7図	P10実測図	7
第8図	S D 1 実測図	8
第9図	P19、P10柱材実測図	9
第10図	P19、P10柱材樹脂顕微鏡写真	10
第11図	縄文土器実測・拓影図	12
第12図	弥生土器・須恵器実測図	13
第13図	韓式系土器拓影図	14

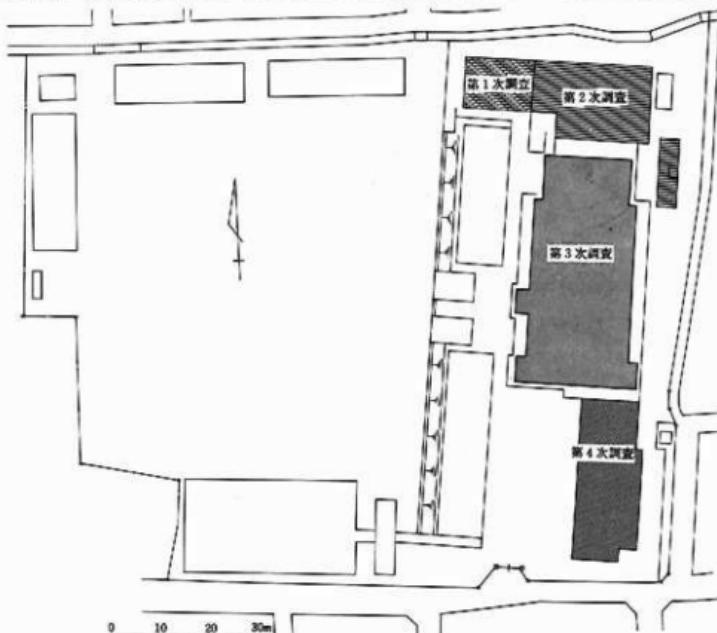
図版目次

図版一	遺跡地航空写真	
図版二	遺構	1. 調査前の状況（西より） 2. 調査風景（北より）
図版三	古墳時代遺構	1. 掘立柱建物跡全景（北より） 2. 掘立柱建物跡全景（西より）
図版四	古墳時代遺構	1. P19柱痕の状況（西より） 2. P19根石の状況（西より）
図版五	古墳時代遺構	1. P10柱痕の状況（西より） 2. P10立割断面の状況（西より）
図版六	古墳時代遺構	1. P1柱痕の状況（南より） 2. P1立割断面の状況（東より）
図版七	古墳時代遺構	1. P21根石の状況（東より） 2. P5根石の状況（南より）
図版八	弥生時代遺構	1. S D 1 内遺物出土状況 2. S D 1 内弥生土器出土状況
図版九	弥生・縄文時代遺構	1. 弥生・縄文時代遺構全景 2. S D 1 完掘後の状況
図版十	縄文時代遺構	1. S K 5 完掘後の状況 2. 縄文土器出土状況
図版十一	遺物	1. 縄文土器 深鉢、浅鉢 2. 縄文土器 深鉢
図版十二	遺物	1. P19柱材、 2. P10柱材
図版十三	遺物	1. 弥生土器 2. 韓式系土器、須恵器

1. 調査に至る経過

東大阪市立石切中学校は、昭和28年学校組合立大東第2中学校として創立された中学校である。このために、木造校舎が多く、老朽化が激しいため、順次新校舎に建替られている。しかしながら、石切中学校の敷地を含む周辺一帯は、周知の芝ヶ丘遺跡の範囲に含まれており、校舎建築に先立つ発掘調査が必要であった。今回の調査以前に3次の発掘調査が実施されている。第1次調査は、昭和47年に実施され、縄文時代後期及び弥生時代後期の遺構、遺物が検出されている。第2次調査は、昭和50年に実施され、縄文時代後～晚期の遺物、古墳時代の建物跡などが検出された。第3次調査は、昭和54年に実施され、縄文時代後～晚期の遺物、弥生時代後期の土塗、古墳時代の建物跡・井戸などの遺構が検出された。これらの調査から、芝ヶ丘遺跡は縄文時代後期から古墳時代までほぼ継続して集落が営まれていたことが明らかとなった。

今回の調査は、中学校敷地の南東部に特別教室を建設するものであり、上記のような知見から、当然各時期の遺構の存在が予想されるため、建物部分398m²について発掘調査を実施した



第1図 調査地点位置図

ものである。調査は、昭和59年10月8日から11月30日まで現場作業をおこない、以後昭和60年3月30日まで整理作業をおこなった。

2. 位置と環境

芝ヶ丘遺跡は、東大阪市中石切町4丁目から北石切町にかけて所在する縄文時代から古墳時代に至る複合遺跡である。

本遺跡の所在する石切町周辺は、生駒山西麓に発達する中位段丘及び低位段丘上にある。東は、大阪府と奈良県の境に連なる生駒山地の丘陵地から、西は恩智川に至るまでの低湿地まで東西に細長く町域が広がっている。遺跡は、低位段丘の台地上、標高30m前後に位置するが、本遺跡の舞台となった縄文時代から古墳時代においては、前面に河内潟及び河内湖が広がり、水辺に面した好条件の立地であったと思われる。

このような好条件の立地により、本遺跡の周辺には古くから多くの遺跡の存在が知られている。旧石器時代の遺跡は、近鉄石切駅周辺に正興寺・千手寺山遺跡の2遺跡でナイフ形石器が採集されている。縄文時代の始め頃には、石切町周辺の台地上を中心にして遺跡が認められる。神並遺跡では、早期の土器・石器とともに上偶も出土している。鬼虎川遺跡では、前期・中期の上器が出土している。縄文時代の後半には、より低地に遺跡が多く営まれるようになる。北から日下、鬼虎川、鬼塚、繩手、馬場川遺跡が間隔をおいて所在している。

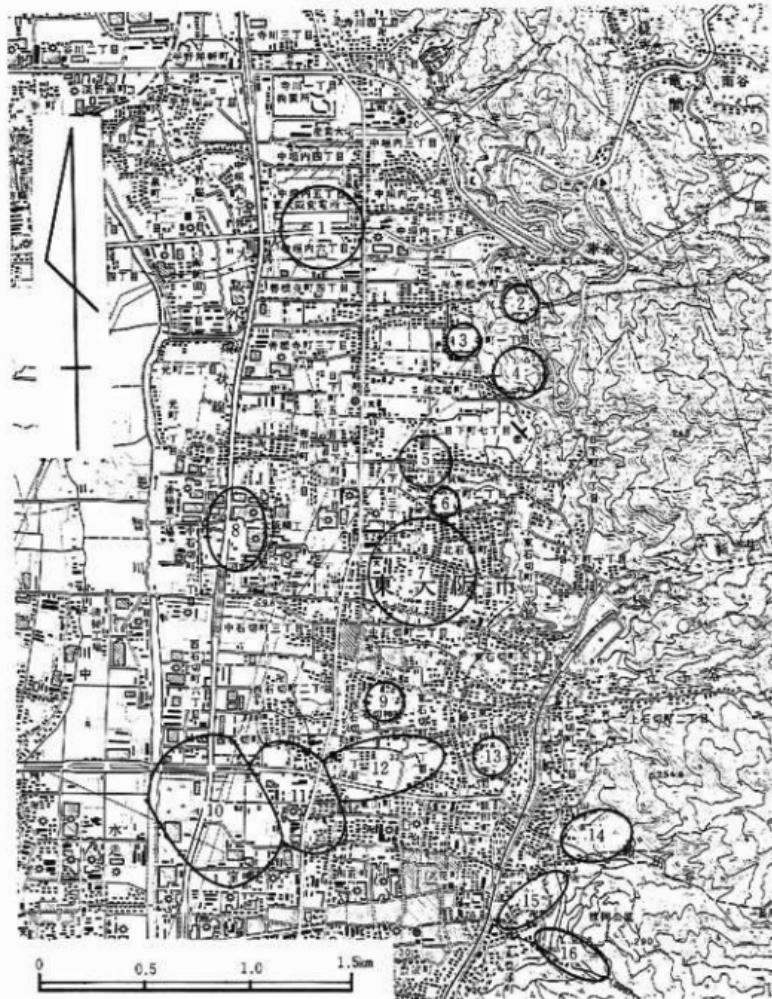
弥生時代には遺跡は、さらに低湿地に進出する。鬼虎川、植附遺跡は、早い時期から集落を営んでいる。中期から後期にかけては、小規模な遺跡を含めて台地上にも多くの遺跡が認められるようになる。西ノ辻、山畑、鬼塚、皿池遺跡がある。古墳時代の集落跡の検出例は、最近の調査で増加している。馬場遺跡では竪穴式住居を検出しているほか、神並、西ノ辻、鬼虎川遺跡では掘立柱建物群を検出している。西ノ辻遺跡では、自然の谷地形を利用した貯水池のような施設も発見されており、5~6世紀にかけて台地上の開発が進んでいたことをうかがわせる遺構が検出されている。また古墳は、5世紀中頃の築造と考えられる塚川古墳の他、6世紀後半以降、生駒山西麓地域に神並古墳群、辻子谷古墳群、豊浦谷古墳群など後期の群集墳が多くつくられている。

芝ヶ丘遺跡が、縄文時代から古墳時代まで継続して営まれる背景には、周辺の遺跡との関連で考える必要があり、今後周辺の調査成果を含めて検討する必要がある。

参考文献

東大阪市遺跡保護調査会編「東大阪遺跡ガイド」 1978年

(財) 東大阪市文化財協会「歴る河内の歴史」—国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展』1984年



- | | | | |
|-----------|----------|-----------|-------------|
| 1. 中垣内遺跡 | 5. 日下遺跡 | 9. 法通寺跡 | 13. 正興寺遺跡 |
| 2. 善根寺山遺跡 | 6. 石凝寺跡 | 10. 鬼虎川遺跡 | 14. 頬田山古墳群 |
| 3. 善根寺遺跡 | 7. 芝ヶ丘遺跡 | 11. 西ノ辻遺跡 | 15. みかん山古墳群 |
| 4. 池端遺跡 | 8. 和泉遺跡 | 12. 神並遺跡 | 16. 豊浦谷古墳群 |

第2図 遺跡位置図

3. 調査の概要

1) 地区割

今回の調査対象地は、南北約35m、東西13mのほぼ長方形の範囲である。地区割は、調査地全域を5mメッシュで区画することにした。まず、調査地北西端を基点 ($x = -145775$, $y = -32210$) として、北側より南北ライン (Y軸) を北から南へ a, b, c のアルファベットの小文字で東西ライン (X軸) を西から東へ 1, 2, 3 の数字で表し、東南コーナーを1区画の名称とした。つまり、トレンチ西北端の地区が1aになり、南東端が4gになる。遺物の取り上げ及び遺構図面の基準ラインは、この地区割にしたがっている。

2) 層位

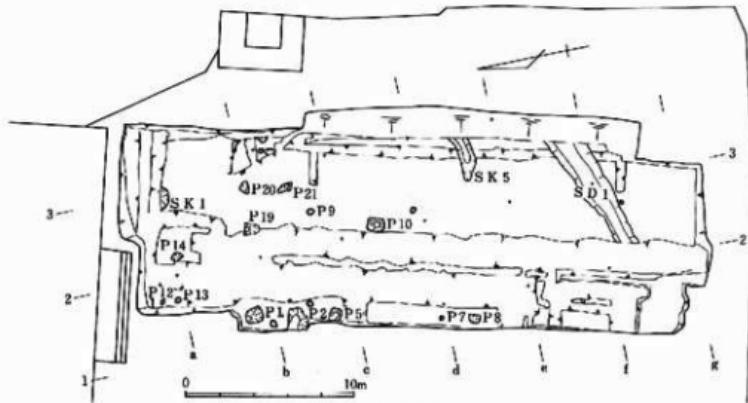
調査地内の層序は、当初の予定より地表面が浅く、基本的には以下の4層に分けることができた。

第1層 盛土。学校建設時の整地層 (真土)、層厚10~25cm。

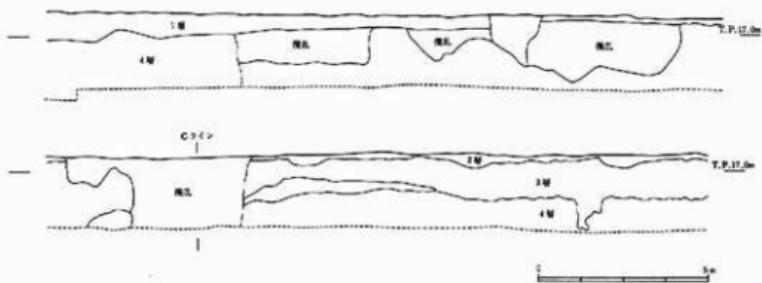
第2層 旧表土。暗緑灰色 (10G 3/1) シルト質粘土。層厚10~25cm。

第3層 黒褐色 (10Y R2/2) シルト質細砂。調査地の南では認められず、ほぼ調査地中央付近より北側で検出される。北に向かって厚さを増している。縄文土器を若干含む。

第3層上面は、古墳時代の遺構面を形成している。



第3図 遺構配置図



第4図 西壁断面図

第4層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質細砂～細礫。地山である。トレンチ南側では、旧表土直下で認められるが、南へいくにしたがって礫が粗くなる。

調査地南側では、盛土を除去するとすぐに地山に達するが、北に向かってなだらかに傾斜している。北側の地山面は、南側と比較して約1.0mの差がある。

3) 調査の成果

調査以前の状況では、調査地の中央を境にして東側は約1.0m高くなっていた。この段差は、学校建設時の盛土であるため、まず機械掘削によって盛土を除去するところから開始した。また、以前には木造校舎が二棟建っており、その基礎コンクリート及び基礎杭によって調査地がかなり搅乱を受けていることがわかった。盛土及び基礎コンクリートを除去し、旧表土を人力で掘り下げると旧表土から約20~30cmで第3層に達する。第3層は、古墳時代の遺構面となり、南側では第3層は認められず、第4層（地山面）が検出されており、この面で古墳時代、弥生時代の遺構が重複して認められた。以下時期別に記述をすすめていくことにする。

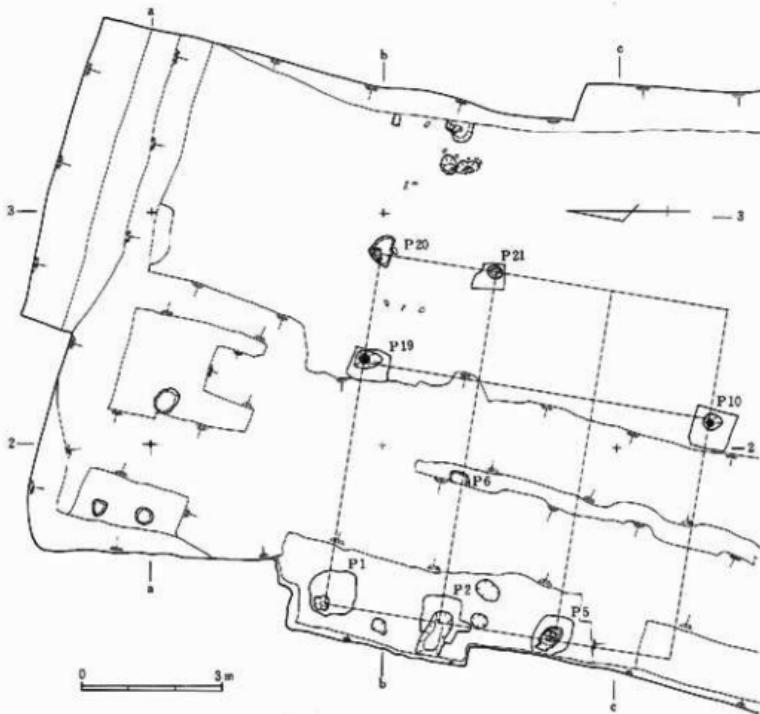
古墳時代の遺構

建物1

2b~2d、3b~3d区にかけて掘方の1辺が80cm前後に達する柱穴群を検出した。中央部分は、木造校舎の基礎工事によって壊されているため不明であるが、計7ヶ所の柱穴を検出し、一応南北7.5m、東西7.5m以上 (4間×4間) の掘立柱建物の存在を推定した。南北の柱

間2.5m、東西は明確ではないが、ほぼ同様の規模と考えられる。但し、P20、P21の柱穴は、他の検出した柱穴とは規模が若干小さくなり、他の庇などの性格も考えられる。

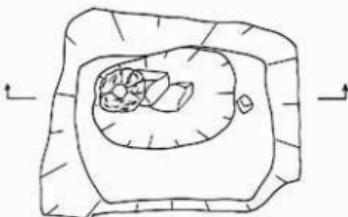
柱穴の中で、P1、P19、P10では柱材が残存し、P5・P19では根石が認められた。P5では柱材が抜き取られた痕跡が認められた。柱穴の詳細を比較的残りの良好なP19で観察すると南北0.86m、東西約0.75m（西側は擾乱によって上部が削平されている）のほぼ方形の掘方内にこぶし大の礫2個（痕跡から考えるとあと1個あった可能性が考えられる。）を据え付けたのち、柱材をたてている。この場合、柱材は掘方の北東に寄せている。これは、P1のものが北西に、P10が東に寄っているのと共通する。但し、根石がすべてのものにあったわけではなく、P10では柱材が残っているにもかかわらず、根石がなく、抜き取られた痕跡もないところから、当初より置いてないものと思われる。



第5図 据立柱建物跡実測図

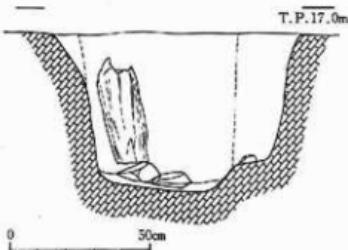
柱穴群

その他の遺構としては、小規模な柱穴を計21ヶ所確認している。柱穴は、P21のように根石をもつものもあるが、大部分は径20~30cm、深さ20cm前後のものである。柱穴内の遺物が少なく、また細片であるため時期を明確にはできないが、古墳時代から鎌倉時代頃までの柱穴が重複していると思われる。



弥生時代の遺構

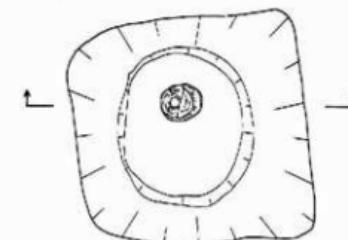
弥生時代の遺構として確認できたのはSD1のみであった。SD1は、幅1.1~2.0m、深さ0.35~0.4mを測り、断面U字形を呈する。全長で約9mを確認した。溝底は、若干東側に低く、西から東北方向へ延びると考えられる。上部は、かなり削平されていると思われる。溝内の堆積は、大きく2層に分けることができた。上層は、土器片を多量に含む埋土を考えられる。下層は、灰色粘土層で溝が機能していた時期の堆積層と思われる。上層と下層との境に土器が集中して出土している。出土土器から溝の時期は、弥生時代後期と考えられる。



第6図 P19実測図

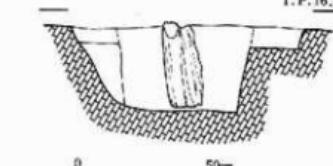
縄文時代の遺構

明確に縄文時代の遺構と判断できるものはなかったが、SK5は堆積層などから縄文時代に属する遺構の可能性が高い。SK5は、調査地中央の東端で検出され、東側は調査地外へ続いている。現状で確認できた規模は、全長2.3mで西側で丸くすぼまって終結している。幅0.7m、深さ3.8mを測る。土坑内より遺物は全く出土していない。性格なども不明。

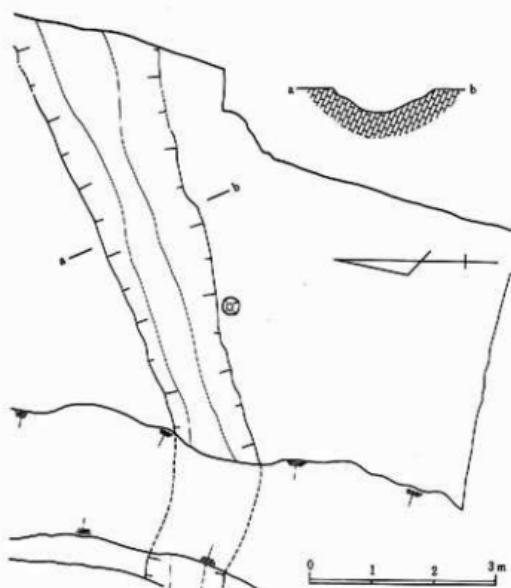


T.P. 16.9m

その他にトレンチ中央西端の包含層内（第3層内）より浅鉢と深鉢が1点ずつ出土しているが遺構などは検出できなかった。



第7図 P10実測図

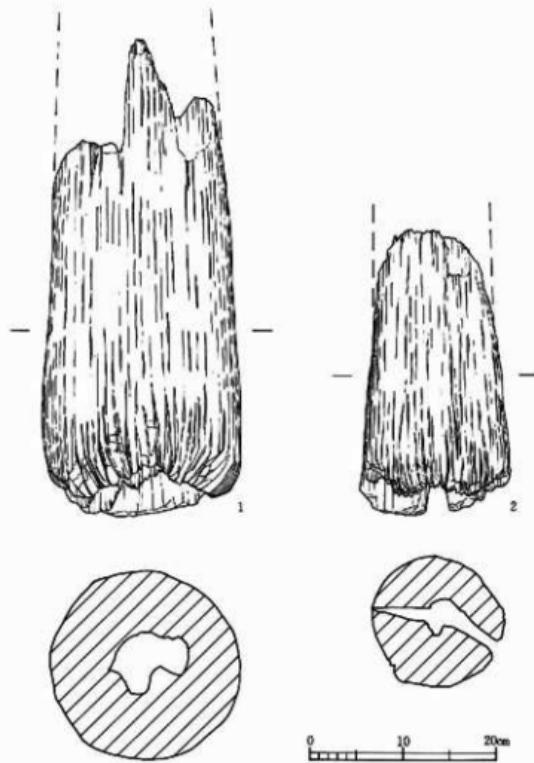


第8図 SD 1 実測図

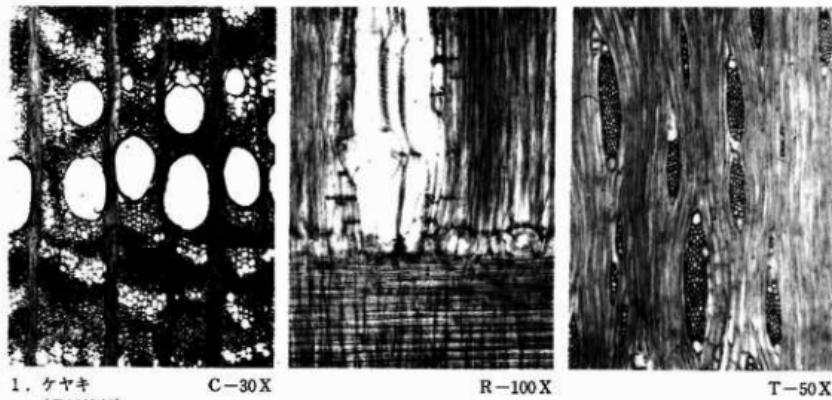
	工事の内容	面 積	調査期間	主 な 土 帯	調査主体	備 考
第1次調査	校舎改築工事	153m ²	昭和47年10月11日 11月12日	縄文後期の落ち込状遺構 古墳時代の自然流路	東大阪市遺跡保護調査会 発掘調査報告－1980年度 1981年	
第2次調査	校舎増築工事 浄化槽設置工事	330m ²	昭和50年11月1日 12月25日	弥生時代中期 桂穴 後期 青、柱穴 古墳時代 井戸1、柱穴	東大阪市遺跡保護調査会	「調査会ニース3」 東大阪市遺跡保護調査会 1978年
第3次調査	体育館建設工事	1070m ²	昭和54年5月28日 1 8月10日	弥生時代後期 土器窓 古墳時代中期 井戸1 その他の土器、ピット窓	更ヶ丘遺跡発掘調査会	
第4次調査	特別教室増築工事	398m ²	昭和59年10月8日 1 11月30日	弥生時代後期 游 古墳時代中期 墓立柱建物1 その他の土器、ピット窓	(財)東大阪古文化財協会	

柱材

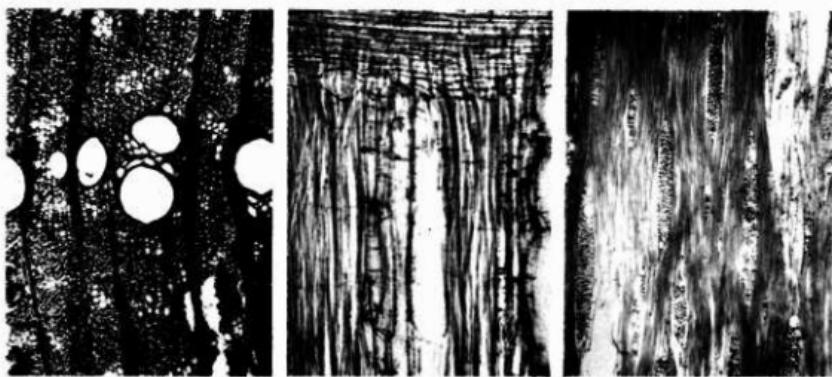
柱材は、現状でP10のものが高さ30.5cm、直径15.6cmを測り、ケヤキ材を使用している。P19のものが高さ50cm、直径20.8cmを測り、ケヤキ材を使用している。ともに木心部がなく、中央部は約8cmほどが空間になっている。柱として使用している時から木心部がなかったのか、腐蝕によるためなのか現状では不明である。掘方内より少量の須恵器細片及び韓式系土器片が出土しており、これらから建物1の年代は、5世紀末頃に比定できる。



第9図 1. P19, 2. P10柱材実測図



1. ケヤキ (P19柱材) C - 30 X R - 100 X T - 50 X



2. ケヤキ (P10柱材) C - 30 X R - 100 X T - 50 X

第10回 P 19、P 10柱材樹胞頭微鏡写真

4. 出土遺物

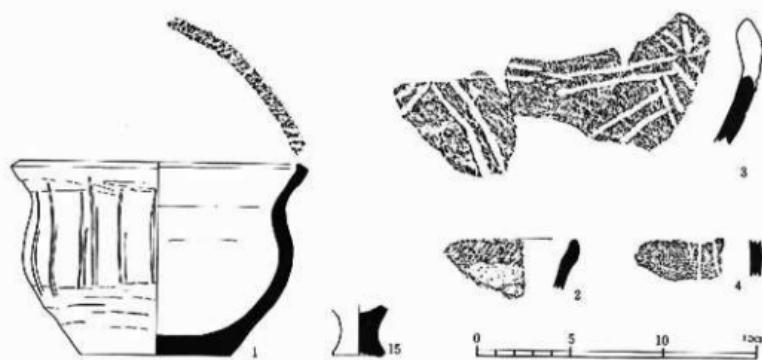
今回の調査では、表土、溝、ピット、包含層から縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、近世陶磁器などがコンテナに約1箱と、柱材、少量のサスカイト片、獸骨を検出した。土器はいずれも小片で完形に復元できるものは数点である。柱材は遺構の項でふれているため、次に主な出土物である縄文土器、弥生土器、須恵器、韓式系土器について記述する。

1) 縄文土器（第11図、図版十一）

本遺跡からは昭和47年の調査で後～晩期の土器が出土している^{#1}。今回の調査でも後期の土器が10数点ばかり出土した。縄文時代の遺構はなく他の時代の土器と共に主に第3層及び表土から出土している。1点は全形をうかがえるが、他の土器は小片である。土器を層位的に分けることはできないがすでに分類されている型式に従うと後期前葉から中葉にかけてのものである。^{#2}

浅鉢 ①は口径15.0cm、器高10.3cmを測り、全体の1/3位遺存していた。広い平底から胴部がそのまま拡がり、肩部は内傾してから口縁部が「く」の字形に外反する。口縁内端部をわずかに肥厚させ、上端部に外傾する面をつくりヘラ原体で刻み目を施す。体部には垂下条線を施し胴部下半から底部にかけてはヘラ削りを残している。底部の器壁は非常に厚く安定しており、体部から口縁部にいくに従い薄く仕上げる。胎土は粗い石英などの砂粒を多量に含む。色調は灰褐色7.5YR5/2を呈す。^{#3} 非河内産。第3層から出土。

深鉢 ②は口縁部が肥厚し外端部に斜行縄文を施す。東大阪市内では縄手遺跡や日下遺跡に類例が多くみられる。内面は削りのためかやや内湾し、口縁上端部は尖り氣味である。口縁部は摩滅しているがL Rの縄文である。胎土には石英・長石・角閃石・くさり礫などを含む。色調は橙色7.5YR7/6を呈す。S P 2から出土。③は波状口縁（4単位）をもつ深鉢の口頭部である。波頂部は内湾してから口縁部が肥厚し、端部を尖らせている。波頂間の口縁端部は少し内方に肥厚させている。外面は波頂部の上部に巻貝で刺突文を1個施し、波頂部を中心に左右に派生する沈線文様帯をつくる。胎土には1～4m/m大位までの石英・角閃石・1m/m大のくさり礫を含む。色調は黄褐色10YR5/6を呈す。第3層から出土。④は2条の沈線を施す体部片で胎土、色調共に③に似る。⑤・⑥は条線と太い平行沈線を施す深鉢で⑤は頭部片、⑥は体部片である。両方共色調は褐色7.5YR4/4を呈し、胎土には1～1.5m/m大位の石英・角閃石とごく少量のくさり礫を含む。表土から出土。⑦は器表面が摩滅しているが幅の広い曲線の沈線を残す深鉢の頭部で色調は黒褐色2.5Y3/1から黒色を呈す。胎土には粗粒の角閃石が多く石



第11図 繩文土器実測・拓影図

英・チャートなども含む。⑧は幅の狭い沈線の間に磨消繩文をもつ胴部片で胎土・色調は共に⑦に似る。表土から出土。⑨は深鉢の体部片で細い線による山形の沈線文を施す。内面下部は横方向にヘラ削りし器壁が薄くなる。色調は外面が赤褐色5 YR 4/8、内面はにぶい黄橙色10Y R 6/3を呈す。胎土には粗粒の石英・長石・角閃石を多量に含む。第3層から出土。⑩は深鉢の頭部片で銳角に交差する沈線文を施す。色調は橙色2.5 Y 6/8を呈す。胎土は⑨と同じく粗砂粒を含む。②～⑩の土器は生駒西麓産である。

⑪～⑬は粗製深鉢で器面を二枚貝の条痕で調整する。⑪・⑬はまっすぐ立つ体部から頭部がくびれ口縁部につづく。口縁部直下に繼ぎ目を残す。⑪の口径は32.6cmを測る。口縁端部を⑫は内傾させているが、⑬は外傾させ、⑭は平坦な面をつくっている。口縁部は幅広いナデ調整で条痕を消し、体部は横方向かやや右下りの条痕を残す。内面は上部をヘラ削りし、下部はハケ目状の線が右下りに走る。⑮は体部から頭部につづくくびれ部であるが⑯の同一固体であろう。また⑪～⑯の土器は口縁部の形態が少しづつ異なるが同一固体の可能性が考えられる。色調は褐色7.5 YR 4/6～橙色7.5 YR 6/6を呈す。胎土は非常に粗く8m/m大位までの石英・長石や4m/m大位までの角閃石・くさり砾を含む。表土及び第3層から出土。これらの土器は生駒西麓産である。

不明土製品（第11図-15、図版十一-15）

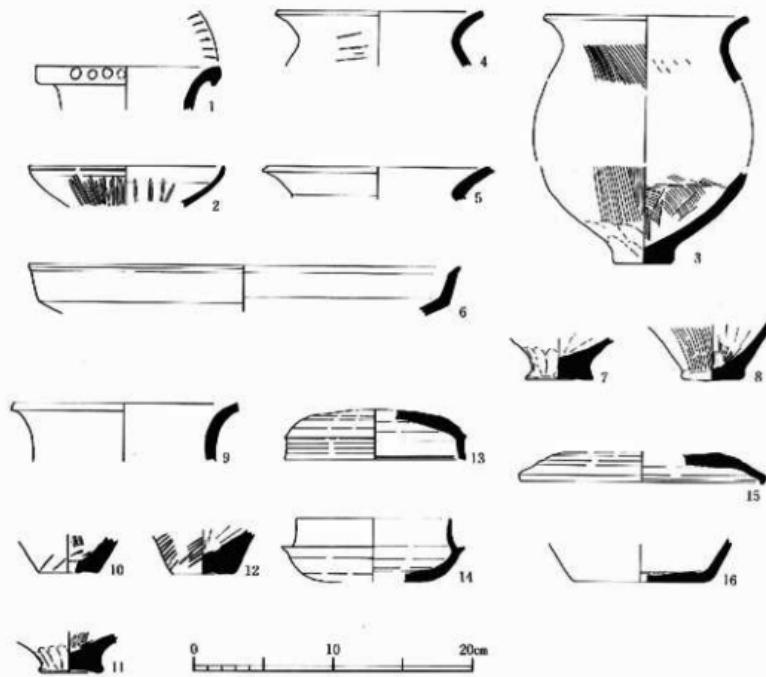
径2cmの円筒状の中実の体部から上・下部共に斜めにひらく土製品である。図の上端部は摩耗しているため更に延びて鉢状のものをつくるかどうか断定できない。色調は褐色10 YR 4/6を呈し、胎土には1～3m/m大の石英・長石、1m/m大の角閃石を多量に含む。くさり砾も少量含む。第3層から出土。

2) 弥生土器（第12図、図版十三-1～8）

後期の土器が少量ではあるがSD1からややかたまって出土した位で、他の遺構や包含層から後期の土器、須恵器、土師器などの小片が混在して出土した。

S D 1 出土土器 ①は口縁端面に円形浮文、内面に列点文を施す壺で口径は13.0cm。②は高杯の浅い杯部で内外面にヘラ磨きを施す。口径は13.8cm。③の壺は厚い底部に球形の胴部から口縁部が外反する。口径は14.6cm。肩部外面を左下りの粗い叩き目の上にハケ目調整し、底部はミガキを施す。底部内面にはくもの巣状のハケ目がみられる。他に④・⑤の壺、⑥の高杯の口縁部、⑦・⑧の底部、図化できないが粗い叩き目（3条/cm）をもつ壺の体部片、壺の口縁部小片などがSD1から出土している。中期末から後期初頭の土器である。

その他の土器 ⑨の壺口縁部、⑩の瓶底部、⑪・⑫の底部がある。⑨の壺の口径は16.0cm。



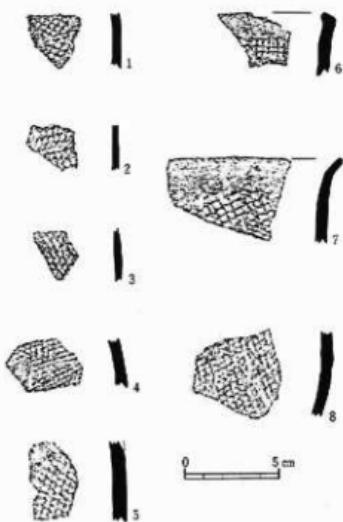
第12図 素生土器・須恵器実測図

①～⑫の上器の胎土には角閃石・石英・長石・くさり礫を含む。壺①・⑨に含む角閃石は微砂粒～粗粒（3 m/m）のもので、他の上器の角閃石は微砂粒である。石英・長石はいずれの土器にも粗粒のものまで含む。色調は壺⑨が褐色を呈すが他の土器は概ね黄～橙色味を帯びる。生駒西麓の中でも本遺跡から出土する上器はひとつの傾向をもつ色調といえよう。

3) 須恵器 (第12図、図版十三-14~16)

遺構に伴うものとしてピットから5世紀後半～6世紀初頭のものと、その他のピット、溝、包含層から7～8世紀のものが出土している。ほとんどが小片である。

⑬の杯蓋は天井部が扁平で厚手につくる。口縁部との境界の稜はやや鋭い。口縁部は短く少し外方に開き端部は内傾する。天井部の約2/3を時計廻りにヘラ削りする。外面に灰白色の自然釉がつく。胎土には1 m/m大の砂粒を含む。色調は青灰色を呈す。口径は13.0 cm。⑭の杯身は立ち上がりがほとんど垂直をなし、壺部は薄くなり上端部に面をもつ。受部は水平に延び



底部はほぼ平らで逆時計廻りに約2/3を削る。受部以下は厚く仕上げる。粗粒の砂粒を少量含む。色調は青灰色で断面は赤紫色を呈す。口径は11.0 cm。⑩はベース直上、⑪はP 10から出土。他にP 1・5・10などから壺の体部片など同時期のものが出土している。

⑫の杯蓋の天井部はほぼ水平で宝珠つまみを欠く。口縁部は下方へ屈曲させ先端部を丸くつくる。内面に仕上げナデを施す。胎土には5 m/m大位までの砂粒を含む。色調は灰色を呈す。口径は17.3 cm。⑬の杯身は底部から外方へ体部が立ち上がる。底部は不調整で粘土紐を巻き上げた継ぎ目を残す。底部と体部の境界は丸味をもつ。胎土は精良で色調は灰白色を呈す。底径は9.6 cm。⑭はSD 2から、⑮はP 10から出土。他に同時期の壺の体部片がSD 5から出土。

第13図 韓式系土器拓影図

4) 韓式系土器 (第13図、図版十三-1~8)

昭和50年度の調査で韓式系土器の良好な資料(完形の壺など)が出土している。^{注6}今回の調査では各ピットから小片ではあるが9点出土した。口縁を有するもの2点の他は体部の破片である。いずれも土師質で外面を叩き目で調整する。叩き目は正格子のものと斜格子のものがある。次に図化した土器の格子目の大きさ、色調、胎土の順に簡単に記述する。

P 1出土 ①・②の体部片が出土。①は 2×1.5 m/mの正格子。外面はにぶい橙色7.5 YR 6/4を呈し、内面は暗赤褐色5 YR 5/6を呈す。角閃石の微砂粒~1.5 m/m大が多く、雲母・石英の微砂粒も含む。②は 1.5×2.25 m/mの正格子。にぶい黄橙色10 YR 6/4を呈す。角閃石の微砂粒が多く、石英、長石、くさり礫を少量含む。図版十三-⑨は①に似る。

P 2出土 ③・④・⑤の体部片が出土。③は 1.5×1.5 m/mの斜格子。にぶい黄橙色10 YR 7/3を呈し、角閃石・石英・長石・くさり礫の微砂粒を少量含む。④は 2×2 m/mと 1.25×1.25 m/mの2種類の正格子(一部斜格子になる)。にぶい褐色7.5 YR 5/4を呈す。⑤は 2×2 m/mの正格子。にぶい橙色7.5 YR 6/4を呈す。胎土には角閃石の微砂粒を④は少量、⑤はやや多く含む。石英は④、⑤共微砂粒~1 m/m大と少量のくさり礫を含む。

P 15出土 ⑥は器種不明の口縁部。端部に面をもつ。3×1.25m/mと1.75×1.25m/mの正格子。オリーブ黄色5Y6/3を呈し、角閃石・雲母の微砂粒~0.5m/m大を多く、石英・長石・くさり礫の微砂粒~1m/m大を少量含む。

P 20出土 ⑦は瓶か鉢の口縁部で口径は27cm前後、端部が外反する。3×3m/mの正格子。色調は③に似る。角閃石・雲母・くさり礫の微砂粒、石英・長石の微砂粒~1m/m大を少量含む。

他に表土から⑧の体部片が出上。1.5×1.5m/mの正格子。外面は浅黄橙色~橙色2.5YR8/3~6/8、内面は灰白色7.5Y7/1を呈す。胎土は⑤に似る。

以上の土器片の中で①・②・④・⑥・⑧・⑨は肉眼観察になるが生駒西麓産の胎土といえる。

注1 下村晴文「芝ヶ丘遺跡発掘調査概報」（『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』 1980年度 東大阪市保護遺跡調査会）

2 泉 拓良「後期の土器」（『縄文文化の研究』4 縄文土器II 雄山閣 1981年）

3 色調は農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」（財）日本色彩研究所を参考にして記述している。

4 原田 修「縄手遺跡1」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報9 東大阪市教育委員会 1971年
中村友博「縄手遺跡2」東大阪市遺跡保護調査会 1976年

吉村博恵「日下遺跡発掘調査概要」東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要26 東大阪市教育委員会
1985年

5 松田順一郎 資料紹介「中澤幸彦氏所蔵の考古遺物」（『調査会ニュース』No.21 東大阪市遺跡保護
調査会 1982）

6 阿部嗣治「東大阪市出土の漢式形土器について」（『東大阪市保護遺跡調査会年報』 1979年度 東
大阪市保護遺跡調査会）

5. まとめ

今回の調査では当初考えていた遺構面の深さとは大きな相違があった。従来の調査では、最終の縄文時代の遺構面は、現地表下約1.5~2.0mの深さで検出されており、若干の旧地形の変化を考慮に入れたとしてもかなりの深さが予想された。しかしながら、調査を開始すると調査地の南側では、表土直下で地山に達し、北へ徐々に傾斜しながらも、北端でも現地表下約80cmで地山に達した。この状況から、旧地形は北の谷川に向かってかなりの傾斜をもっていたことがわかる。それが谷部が徐々に埋まるによってそこに集落を営むようになり、南側で検出された縄文・弥生時代の遺構は上部を削平された状況であり、北側の古墳時代の遺構は比較的良好な遺存状態であった。このような知見から、遺構を覆う包含層はほとんどなく、出土土器もコンテナ箱1杯程度であった。次に検出した遺構を以前の調査結果を参考にしながらまとめておきたい。

古墳時代の遺構について

以前の調査で6世紀初頭～中頃の時期の素掘りの井戸遺構2基、ピット群、土塗などが確認されている。ピット群は、明確な建物を復元するには至っていないが、径30cm前後のものが數十ヶ所確認されており、小規模な掘立柱建物が想定される。しかしながらピット群は井戸遺構2基の周辺に分布するわけで、何らかの居住域であったと思われる。今回検出した掘立柱建物は、掘方の径が0.8m以上の大規模なものであり、以前の調査のピット群とは大きな相違がある。今回の掘立柱建物は、以前のピット群にもっとも近い位置にあり、特に昭和54年の調査で検出した井戸とは5~6mの距離にある。以上のことから、今回の建物跡は、従来の建物跡に付属する倉庫などの機能をもったものであり、居住区域の一画に建てられていたと思われる。

今回の調査では、掘立柱建物より南側では、古墳時代の遺構は何ら検出していない。これが、先述したように、南側の台地上が後世の削平等によって遺構が残っていないのか、今回検出した掘立柱建物が居住域の南端を示すものかは、現時点では断定することができない。

さて、古墳時代中期の掘立柱建物は、最近資料が増加している。東大阪市内でも鬼塚・鬼虎川・神並・瓜生堂・西岩田・若江北・巨摩庵寺遺跡などで検出されており、ほぼこの時期では掘立柱建物が住居の主流を占めていたことがうかがわれる。この中でも、鬼塚・鬼虎川遺跡で検出された建物跡は、柱穴の規模も大きく、本遺跡例に類似する例である。

鬼塚遺跡例は、昭和57年の調査で検出されたもので、0.7~0.8mの掘方内に10cmの柱痕が残存しており、根石をもつものもあった。擾乱が激しく全体は不明であるが、少なくとも2間×3間の掘立柱建物が想定される。¹¹

鬼虎川遺跡では、昭和58年の大阪府教育委員会の発掘調査で古墳時代中期と後期の掘立柱建

物跡が2棟ずつ計4棟確認されている。特に古墳時代中期の建物跡は、掘方の径約1m、深さ0.4mを測る2間×2間の大型のものである。^{註1}

以上のように柱穴の底部に根石を据える建物や径0.5~0.8m以上の掘方をもつ掘立柱建物が、最近相次いで確認されている。これらの建物は、2間×2間位の小規模な大きさの建物であることから、倉庫的な施設と考えられる。このような倉庫の施設が生駒西麓地域において多く認められることは、一般的に古墳時代中期において居住施設内に存在してと考えられ、居住形態を考える上で貴重な資料となった。

弥生時代の遺構について

弥生時代の遺構は、第2次調査で幅約2m、深さ約0.3~0.5mの溝を検出しておらず、第3次調査では2.5×2mの梢円形の土器窪が検出され、いずれも弥生後期の時期にあたる。これらの遺構と今回検出したS D 1とは同時期のものと考えられるが、調査面積が狭いことから集落のどの部分をしめるのか不明である。弥生時代の遺構は、出土上器が比較的豊富な割に遺構の検出例が少ない。このことは、後世の削平等によって遺構が失われている結果であろう。

縄文時代の遺構について

縄文時代の遺構は、第1次調査で落ち込み状の遺構を検出しているが、他の調査ではあまり明確ではない。今回の調査でも土試状の遺構を検出したものの時期、性格とも不明である。出土上器は、後期~晩期まで少量ずつではあるが、各々の調査区で出土しているので近辺にこの時期の遺構が存在する可能性が高い。今後、周辺地域を含めた調査が望まれる。

注1 昭和57年にマンション建設に伴なって(財)東大阪市文化財協会が発掘調査を実施している。内容については、福永信雄、中西克弘の両氏に教示を受けた。

2 大阪府教育委員会「神並・西ノ丘・鬼虎川遺跡」現地説明会資料 1973年

図 版





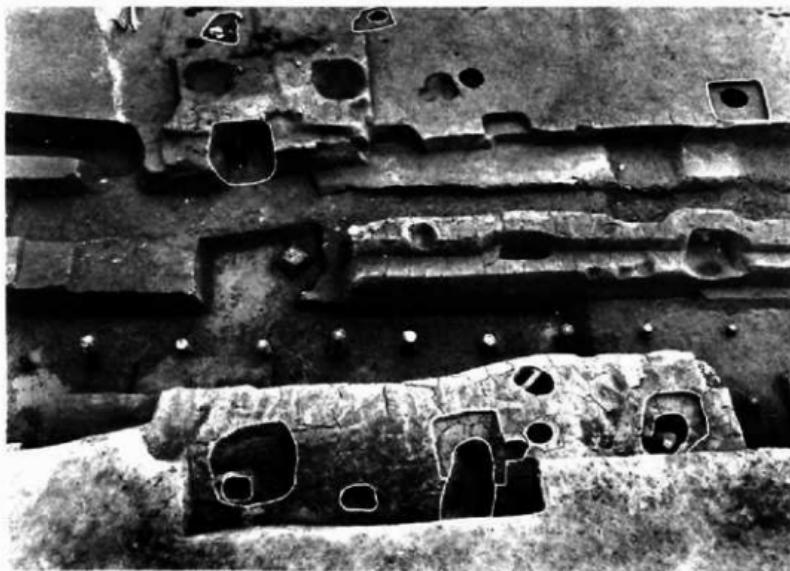
1. 調査前の状況（西より）



2. 調査風景（北より）



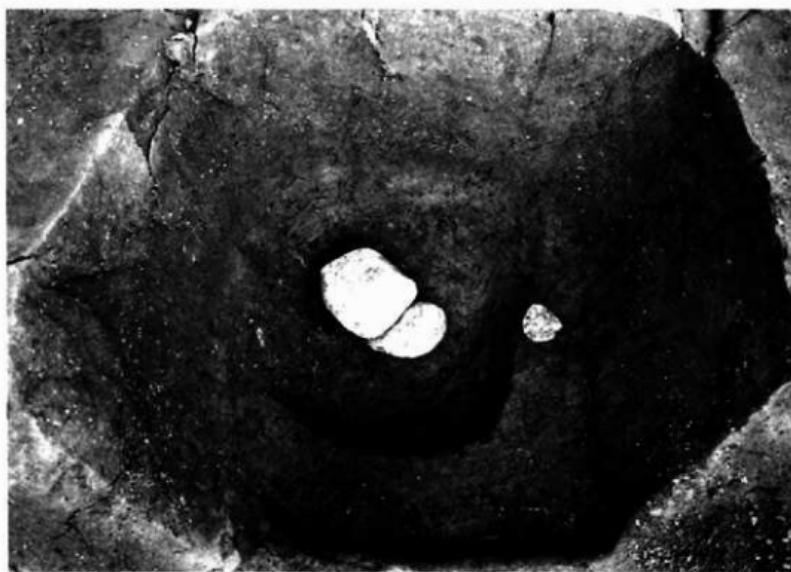
1. 掘立柱建物跡全景（北より）



2. 掘立柱建物跡全景（西より）



1. P19柱痕の状況（西より）



2. P19根石の状況（西より）



1. P10柱痕の状況（西より）



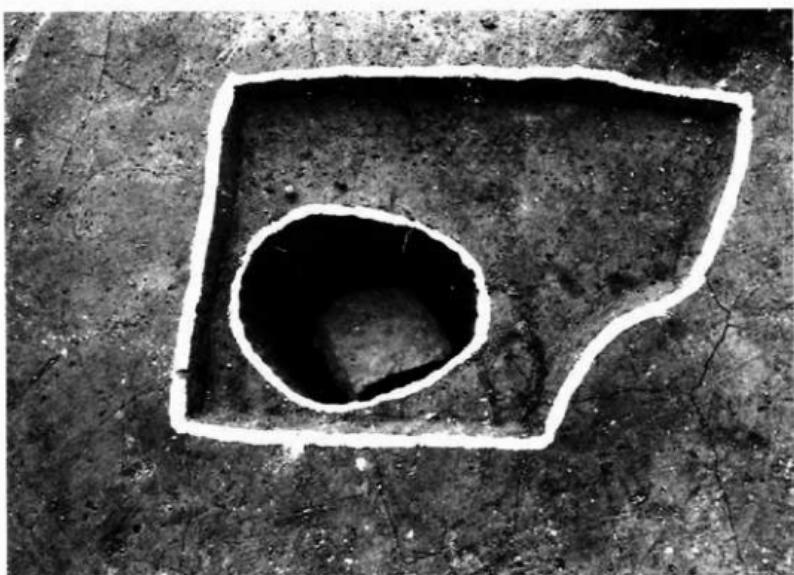
2. P10立割断面の状況（西より）



1. P 1柱痕の状況（南より）



2. P 1立割断面の状況（東より）



1. P 21根石の状況（東より）



2. P 5根石の状況（南より）



1. SD 1 内遺物出土状況



2. SD 1 内弥生土器出土状況



1. 弥生・縄文時代遺構全景



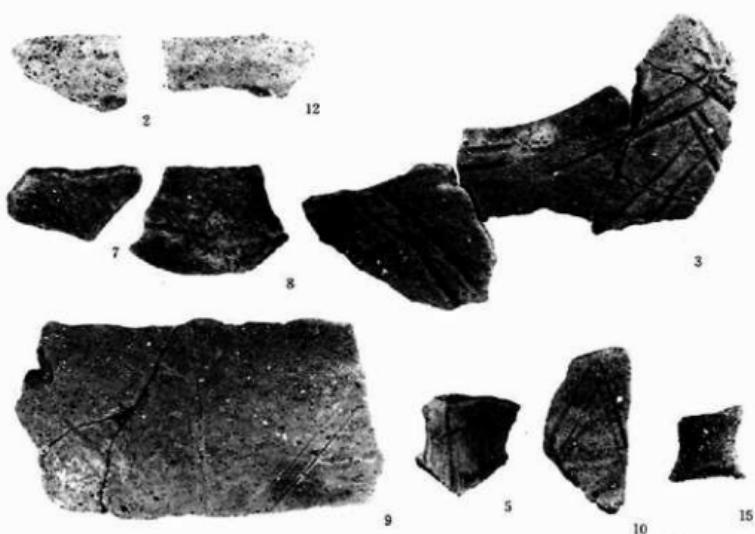
2. SD 1 完掘後の状況



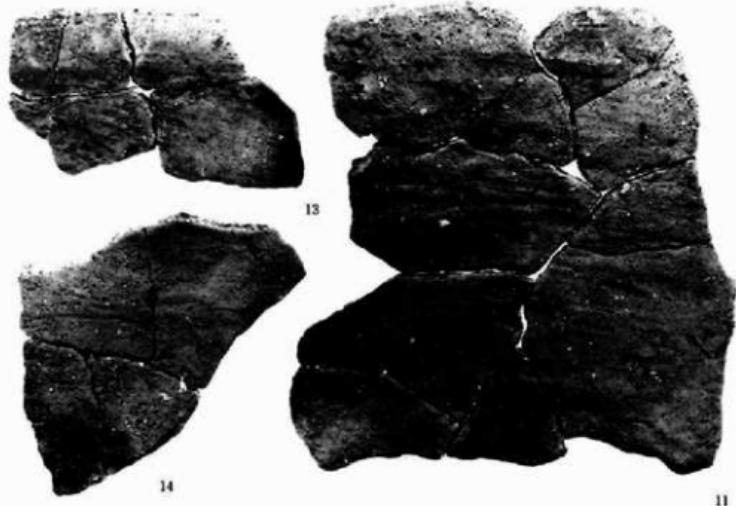
1. SK 5 完掘後の状況



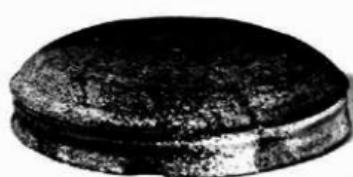
2. 縄文土器出土状況



1. 縄文土器 深鉢・浅鉢



2. 縄文土器 深鉢



13



1



1



2

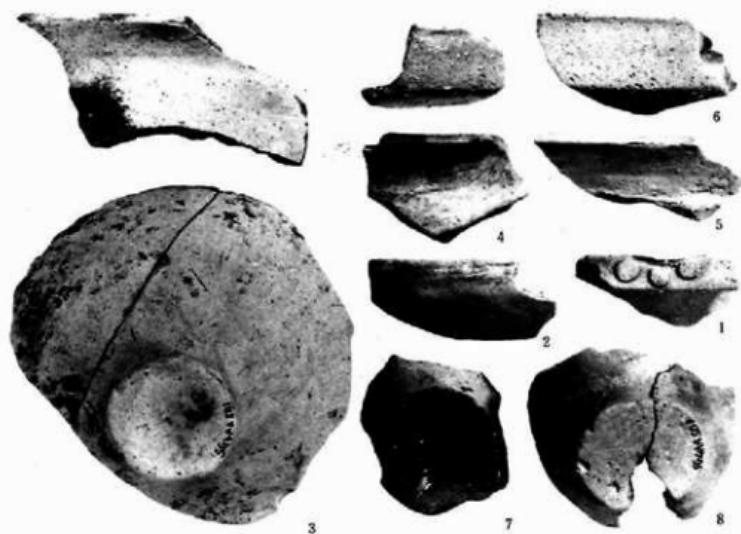


1*

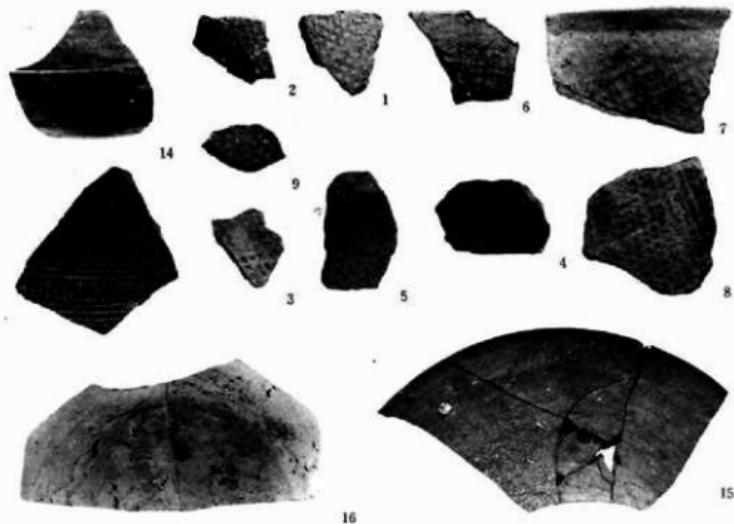


2*

1. P19柱材、2. P10柱材



1. 弥生土器



2. 韓式系土器、須恵器

芝ヶ丘遺跡発掘調査概報
—石切中学校校舎増築に伴う第4次調査—

昭和60年3月

発 行 財団法人東大阪市文化財協会
印 刷 (株)中島弘文堂印刷所